

文部省檢定

子女教育 日本文法書

上卷

山田孝雄 著

東京
寶文館藏版

大正十五年改訂版

48
815
大14

教科
42
200

42221

教科書文庫

4
815
42-1926
2000
68975

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

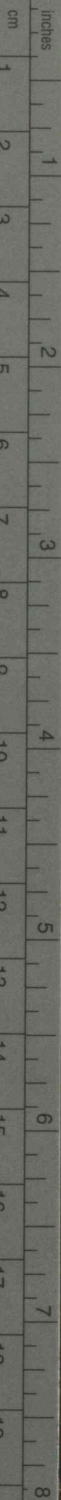


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

日九十月二年五十五大
濟定檢省部文
用科語國校學女等高

教科書文庫
4
815
42-1926
2000068975

46
815
716

山田孝雄著

女子教育
日本文法書

東京寶文館藏版

大正十五年
改訂版

広島大学
教
68975
圖書

広島大学図書
2000068975




例言

一、本書は高等女学校の文法教科書に充てむがために編纂したるものなり。

一、本書は文法全般に亘り、平易簡明を旨として記述したるものなり。ことに従來の注入教授、器械的記憶の弊を一掃せむがため、多くの文例より推して文法上の法則を發見せしめ、或は生徒をして種々の表を作製せしむるなど、一に開發的、歸納的に叙述したり。

一、本書の練習問題は質及び量に於て、精選を施し以て正確なる知識の收得を期したり。

一、本書の編成につきては佐久田昌教氏の助力による所多し。茲にこれを記して謝意を表す。

大正十一年十月

女子教育 日本文法書 上卷

目次

總說……………一

單語篇

第一章 名詞……………四

第二章 代名詞……………六

第三章 動詞……………八

第四章 形容詞……………四三

第五章 助動詞……………四九

第六章 副詞……………七二

女子教育 日本文法書 上卷目次終

女子教育 日本文法書 上卷

總說

三 人の思想を聲音にてあらはせるものを言語といひ、言語を形にあらはす符號しごうを文字といふ。文字にてまとまりたる思想を書き綴れるものを文又は文章といふ。

三 言語は各國必ずしも同じからず。英吉利語佛蘭西語、獨逸語、露西亞語、支那語、日本語等皆異なるものなり。國語國文とは國民が自國の言語文章を呼ぶ名稱にして、我等は

日本語をさして國語といひ、日本文をば國文といふなり。
〔三〕 談話に用ゐる言語と文章に用ゐる言語とは元來同じかるべきものなるに、多少法則の異なる場合あり。かくの如き場合には談話に用ゐるものを口語といひ、文章に用ゐるものを文語といふ。

〔四〕 口語及び文語にはそれぞれ定まれる法則あり。之を文法といふ。文法によらざれば正しくおのれの思想をあらはすことを得ず。

〔五〕 文法にては、すべて一つ一つの語をば單語といふ。例へば

これは梅の花だ。

は六つの單語よりなるが如し。

〔六〕 單語はこれを九つの種類に分つ。

- | | | | | |
|----|-----|-----|-----|-----|
| 名詞 | 代名詞 | 動詞 | 形容詞 | 助動詞 |
| 副詞 | 接續詞 | 感動詞 | 助詞 | |

これなり。而その單語の各種類を品詞といふことあり。

單語篇

第一章 名詞

三

石山寺の秋の月、雲をさまりて影清し。

春よりさきに咲く花は、比良の高嶺の暮の雪。

右の文例において「石山寺」「秋」「月」「雲」「影」「春」「花」「比良」「高嶺」「暮」「雪」は何れも事物の名稱として用ゐたる單語なり。かくの如くすべて事物の名稱となれる單語を名詞といふ。

四

一、二、三、百、千、萬、四、百、個、第一、何、十、番、等、の如く、事物の數量、又は順序を數ふるに用ゐる單語も名詞に屬す。

練習

次の文章中の名詞を抜き出せ。

- (1) 日章旗は白地に赤でかゝれてあります。
- (2) 大原女の服装は頗る詩趣に富んでゐる。
- (3) 紫式部は源氏物語をつくれり。
- (4) 夕日沈めば松蟲、鈴蟲、機織こほろぎなど鳴き出づ。
- (5) 七重八重花は咲けども山吹きのみの一つだになきぞかなしき。
- (6) 習慣は第二の天性なり。
- (7) 勉強は幸福の母にして怠惰は立身の敵なり。
- (8) 金錢も、名譽も、地位も、身體が弱くては役に立たぬ。

- (9) 學問の要は活用にあり。
- (10) 納税は國民の義務なり。

第二章 代名詞

〔五〕

われ今心に思ふことあれど、汝にはいひがたし。

これとそれとは同じからず。

この事たれ言ふとなく評判になつた。

こちらには川が流れ、あちらには山が峙つてゐる。

これらの文中にある「われ」「汝」「これ」「それ」「この」「たれ」「こちら」「あちら」は何れも事物をさしてその名稱をいふ代りに用ゐ

たる單語なり。これを代名詞といふ。

〔六〕 名詞と代名詞とを體言といふ。

練習

次の文中にある代名詞を抜き出せ。

- (1) それはわらはも望むところなり。
- (2) われとかれとは親友なり。
- (3) いづこもおなじ秋の夕暮。
- (4) あなた様にはいつ頃御上京遊ばされ候哉。
- (5) あちこち歩いてゐるうちに、日がくれてしまった。いづこともなく、さびしい野寺の鐘が聞える。

- (6) 朝げの煙こゝかしこに立ちのぼりて、あなたには早
や日影も見えそめたり。
- (7) わが友はいづちに行きしか、かなた、こなたたづぬれ
ど見あたらず。
- (8) この説を聞く人、いづれもかれの博學に服せり
- (9) 夕日山のかなたに沈めば、やがて森のこなたに燈火
の光みえそめぬ。

第三章 動詞

二三 山を越え、川を渡りて、漸く人家ある所に出づ。

右の文例において、「越え」「渡り」「出づ」は何れも事物の作用をあらはし、あるは事物の存在をあらはす單語なり。かくの如く事物の作用、存在をあらはすに用ゐる單語を動詞といふ。

(三)

起	待
くくき	てつらた
れる	

(1)

- (イ) 停車場にて待たむ。
- (ロ) 數時間待ちたり。
- (ハ) 汽車を待つ。
- (ニ) 汽車を待つもの多し。
- (ホ) しばし待てば、汽車來る。
- (ヘ) こゝに待て。

(2)

- (イ) 明朝早く起きむ。
- (ロ) 朝早く起き出づ。
- (ハ) 朝は六時に起く。
- (ニ) 早く起くる習慣あり。
- (ホ) 早く起くれば、心地よし。
- (ヘ) 朝早く起きよ。

著
きき
される

爲
すすしせ
れる

死
ねぬぬぬにな
れる

(3)

- (イ) 制服をきむ。
- (ロ) 制服をきたり。
- (ハ) 制服をきる。
- (ニ) 制服をきる時あり。
- (ホ) 制服をきれば、心正し。
- (ヘ) 制服をきよ。

(4)

- (イ) 早く食事をせむ。
- (ロ) 七時に食事をしたり。
- (ハ) 兄とともに食事をす。
- (ニ) 食事をする暇もなし。
- (ホ) 今、食事をすれば、待ち給へ。
- (ヘ) 早く食事をせよ。
- (イ) 來春試験を受けむ。
- (ロ) 試験を受けたり。
- (ハ) 教室にて試験を受く。
- (ニ) 試験を受くる生徒あり。

(5)

- (イ) もろともに死なむ。
- (ロ) 一門悉く死に絶ゆ。
- (ハ) 戦役にて死ぬ。
- (ニ) 王事に死ぬる人多し。

(6)

- (ホ) 今日試験を受くれれば、成績は近きに知られむ。
- (ヘ) 今年はず試験を受けよ。

- (ホ) 我ここに死ぬれば、汝は生き残りて王事につとめよ。
- (ヘ) 潔く王事に死ね。

受
くくけ
れる

以上の文例を通覽すれば、動詞につき多くの事柄を發見すべし。即ち

- (一) 動詞は用ゐる方の異なるによりて、語の形に變化を生ずること。(かくの如き語形の變化を活用といふ。)
- (二) 動詞は五十音圖の一行に限りて活用し、決して他行に亘らざること。

(三) 動詞の活用の形に種々あること。(五十音圖の段にあ

てはめて考へみよ。

(四)動詞の用ゐ方は六通りあること。(各文例のイ、ロ、ハ、ニ、ホ、への各の場合及び動詞の下の語につきて注意せよ)等なり。

練習

一、上の文例にならひて次の動詞の活用を考へみよ。

- 讀む
- 書く
- 棄つ
- 落つ
- 悔ゆ
- 有り
- 絶ゆ

二、次の文中より動詞を抜き出して五十音圖の何れの行に活用するかを考へよ。

(1)朝起きて、手を洗ひ、口を嗽ぎ、鏡に對ひて髪を梳る。

(2)雲吹く風をながめ、て水の音に聞き入りぬ。

(3)二三の友と連れ立ちて行く。

(4)見わたせば眺むれば、見れば、須磨の秋。

(5)房總二州の山は霞に消えて探れども見えず。

(6)困難に堪へて事業に當る人、絶えず理想に向ひて進む人、必ずや成功の彼岸に達せむ。

(三) 動詞の用ゐ方に六通りあることは既に述べたるが如し。今各の場合を前にあげたる文例によりて説明せむ。

(イ)の文例をみるにすべて動詞の下に「む」つきて事の未だ

然らざる場合をあらはすに用ゐらる。この語形を未然形といふ。この形は「む」の外に「雨降らば中止せむ」「死なば苦を忘るべし」などの如く「ば」に接して假に定めていふ意を表すにも用ゐらる。

(口)の文例をみるに、動詞の下に動詞、形容詞(後に説く)のつく場合に用ゐらる。この語形を連用形といふ。動詞形容詞を總稱して用言といふによりてかく名づけたるなり。「たり」もまたこの形につく。

(ハ)の文例をみるに何れも文章を終止するに用ゐらる。この語形を終止形といふ。

(ニ)の文例をみるに何れも名詞、代名詞即ち體言に續くる

に用ゐらる。この語形を連體形といふ。

(ホ)の文例をみるに動詞の下に「ば」つきて已に定まれることを條件として示すに用ゐらる。この語形を已然形といふ。この形には「ど」「ども」のつくことあり。

(ヘ)の文例をみるに何れも命令の意をあらはすに用ゐらる。この語形を命令形といふ。

(四) 今前にあげたる文例中の動詞につきて以上の六語形を表にして示さむ。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
待						
た						
ち						
つ						
つ						
て						
て						

不 居 可 終 止 事 件 名 命 令 形

受	死	爲	著	起
け	な	せ	き	き
け	に	し	き	き
く	ぬ	す	きる	く
くる	ぬる	する	きる	くる
くれ	ぬれ	すれ	きれ	くれ
け	ね	せ	き	き

〔五〕 右の表においても知る如く「死ぬ」といふ動詞は動詞中最も多く語形の變化を有すれども、その他の動詞にありては同一の語形にて二三の用を兼ねるものなり。されば或動詞の六の語形を知らんとせば、先づ左の如く「むば」「たり」とを得。

(或は動詞)「〇」「時」(その他の體言)「ば」「ど」「ども」「よ」と記しおきて、その動詞よりこれらの語にいひつゞけて見るをよしとす。かかる方法による時は如何なる動詞にてもその六語形を知ることを得。

かか	かき	かく	かく	かけ
…むば	…たり	…〇	…時	…よ
未然形	連用形	終止形	連體形	命令形

に	に	に	に	に
…むば	…たり	…〇	…時	…よ
未然形	連用形	終止形	連體形	命令形

練習

一、次の文章中の動詞を指摘し、且つその語形の名をいへ。

- (1) 百舌鳴く林に、柿の實の赤きを見る。
- (2) 病は口より入り、禍は口より出づ。
- (3) 恩を受けば必ず報いよ。
- (4) 恥づることを知らざれば人といひ難し。
- (5) 雨降りて地固まる。
- (6) 忠言は耳に逆へども行に利あり。

二、次の動詞の六の語形をいへ。

- 育つ
- 笑ふ
- 流る
- 感ず
- 煮る
- 老ゆ
- 捨つ
- 恨む

〔二六〕 動詞が五十音圖の同じ行の幾段に亘りて活用するかによりて、動詞の活用を類別して次の九種とす。

- 四段活用 ○ ナ行變格活用 ○ ラ行變格活用
- カ行三段活用 ○ サ行三段活用 ○ 上二段活用
- 下二段活用 ○ 上一段活用 ○ 下一段活用

〔二七〕 四段活用「讀む」「書く」の動詞の活用語形につき考へみよ。然る時はこれらの動詞が五十音圖中の「ア」「イ」「ウ」「エ」の四段に活用しその語形は、終止形と連體形と同じく、又已然形と命令形と同じきを發見すべし。かくの如き活用を四段活用といふ。(十五頁の表を参照)

〔二八〕 文語にて四段活用をなす動詞は、口語にても、また四段活用をなしその語形全く同じ。

練習

- 一、次の動詞を活用せしめてその六語形を表につくりみよ。
行く 貸す 待つ 買ふ 讀む 知る
- 二、次の動詞中より四段活用の動詞を擇び出せ。
返す 出づ いふ 見る 取る
急ぐ 住む 立つ 問ふ 受く
- 三、國文教科書より四段活用の動詞を六つあげよ。

〔二九〕 ラ行變格活用 「有り」といふ動詞につき、その活用を考へみよ。然る時は、この動詞が五十音圖のラ行の「ア」「イ」「ウ」「エ」の四段に亘りて活用するを知るべし。されど通常の四段活用の動詞と異なり、終止形は四段活用にありては、「ウ」段なるに、この活用にありては、「イ」段を用ゐる。されば、通常の四段活用と分ちて、「あり」の如き活用をラ行變格活用といふ。

〔三〇〕 ラ行變格活用の動詞は連用形と終止形と同じく、又已然形と命令形と同じきものなり。

〔三一〕 ラ行變格活用の動詞は「有り」の外「居り」、「侍り」の二語のみ。

〔三二〕 口語の動詞にはラ行變格活用をなすものなく、文語の

ラ行變格活用の動詞は口語にては通常の四段活用をなす。

〔三〕ナ行變格活用 「死ぬ」といふ動詞は前にあげたる文例

にて知る如く、五十音圖の「ナ」行の「ア」「イ」「ウ」「エ」の四段に亘りて活用する外に、なほ「ウ」段に「ると」「れ」との添ひたるものにも活用す。されば活用の形すべて六つあることは、既に説明したるが如し。かやうの活用をナ行變格活用といふ。

〔四〕口語の動詞にはナ行變格活用をなすものなく、文語のナ行變格活用の動詞は口語にては通常の四段活用をなす。

練習

△一、ラ行變格の活用形を表にて示せ。

二、有りといふ動詞の口語の活用を文例にて示せ。

三、ナ行變格の各活用形を示せ。

四、死ぬといふ動詞の口語の活用を文例にて示せ。

〔五〕上一段活用 下一段活用 「著る」「蹴る」の動詞の活用形

を考へみよ。然る時は「著る」は五十音圖の「イ」段の一段とこの段に「ると」「れ」との添ひたるものと亘りて活用し、「蹴る」は五十音圖の「エ」段の一段と、この段に「ると」「れ」との添ひたるものとに亘りて活用するを知るべし。かく「著る」の如く五十音圖の中央より上の一段に活用するを上一段活用といひ、

「蹴る」の如く中央より下の一段に活用するを下一段活用とす。

〔三〕 上一段活用と下一段活用とは未然形と連用形と命令形と同じく、又終止形と連體形と同じきものなり。

〔三三〕 普通に用ゐる上一段活用の動詞は次の十語なり。

射る	鑄る	著る	似る	煮る
干る	見る	惟る	顧る	鑑る
用ゐる	居る	率ゐる		

〔三六〕 下一段活用の動詞は「蹴る」の一語あるのみ。

〔三九〕 文語にて上一段、下一段活用をなす動詞は、口語にても、また上一段、下一段活用をなし、その語形全く相同じ。

練習

一、上一段の活用形を表にて示し活用語をあてはめよ。

二、下一段の活用形を表にて示せ。

〔三〇〕 上二段活用 下二段活用 「起く」「受く」の二動詞につき

その活用形を考へみよ。然る時は「起く」は五十音圖の「イ」「ウ」の二段となほ、「ウ」段に「る」と「れ」の添ひたるものと亘りて活用し、「受く」は「ウ」「エ」の二段となほ、「ウ」段に「る」と「れ」の添ひたるものにと亘りて活用するを知るべし。かくの如く二語とも同じく二段に活用すれども、「起く」の方は中央より上の二段に活用し、「受く」の方は下の二段に活用す。故に「起く」の如く活用するを上二段活用といひ、「受く」の如く活用するを下

上二段ヤ行に活用する動詞は、老ゆ、悔ゆ、報ゆの三語なり。

下二段ワ行に活用する動詞は、植う、据う、飢う、の三語なり。

二段活用といふ。

〔一〕上二段活用、下二段活用の動詞は未然形と連用形と命令形と同じきものなり。

〔二〕口語には上二段活用、下二段活用をなす動詞なし。文語の上二段活用、下二段活用の動詞は口語にては上一段活用、下一段活用をなす。

練習

- 一、上二段の活用形を表にて示し次の動詞をあてはめよ。
過ぐ 落つ 強ふ 恨む 老ゆ 懲る
- 二、下二段の活用形を表にて示し次の動詞をあてはめよ。

得 授く 寄す 捨つ 尋ぬ 教ふ 改む

榮ゆ 枯る 植う

三右の動詞の口語の活用形を表にて示せ。

四、次の動詞の活用形をいへ。

掛く	満つ	綻ぶ	企つ	秀づ	集む
据う	盡く	攀づ	重ぬ	延ぶ	迎ふ
媚ぶ	下る	揃ふ	求む	疲る	預く

五、國文教科書より上二段下二段活用の動詞を各十あげよ。

〔三〕カ行三段活用 「來」といふ動詞につきその活用形を考へみよ。然る時は五十音圖のカ行の「き」「く」「この三段と「く」

カ行三段活用はカ行變格活用ともいふ。

に「と」「れ」との添ひたるものと亘りて活用するを知るべし。かくの如き活用を**カ行三段活用**といふ。この活用をなす動詞は「來」の一語のみなり。

〔四〕カ行三段活用は未然形と命令形と同じきものなり。

〔五〕「來」の口語を考へみよ。然る時は文語の終止形「く」が「來」と變るのみにて、他の語形の同じきを知るべし。

〔六〕**サ行三段活用** 「爲」といふ動詞につき、その活用形を考へみよ。然る時は五十音圖の「サ」行の「し」「す」「せ」の三段と「す」に「れ」の添ひたるものと亘りて活用するを知るべし。かくの如き活用を**サ行三段活用**といふ。この活用に屬する動詞は「爲」の一語のみなり。

サ行三段活用はサ行變格活用ともいふ。

〔七〕サ行三段活用は未然形と命令形と同じきものなり

〔八〕「爲」の口語を考へみよ。然る時は文語の終止形「す」が口語にては「する」と變るのみにて他の語形は同じきを知るべし。

〔九〕サ行三段活用は名詞、漢語、外國語等を動詞とする力を有するものなり。例へば

話

發達せしすするすれせ

論

の如し。

上二段活用は
アイウエオ
下二段活用は
アイウエオ

練習

一、カ行三段の活用形を表にて示せ。

二、爲の口語の活用を文例にて示せ。

〔四〕動詞活用の見分け方 多くの動詞のうちには、その活用の紛れ易きものあり。今これを識別する便法を左に述べむ。

(一)上一段活用、下一段活用、ナ行變格活用、ラ行變格活用、カ行三段活用、サ行三段活用に屬する動詞は少ければ先づ諸記し置くべし。

(二)書か…む、讀ま…む、習は…むなどの如くその未然

形が「ア」段に活用するものは四段活用の動詞なり。

(三)落ち…む、起き…むなどの如くその未然形が「イ」段に

活用するものは上二段活用の動詞なり。

(四)受け…む、榮え…むなどの如くその未然形が「エ」段に

活用するものは下二段活用の動詞なり。

練習

一、次の動詞の活用形を見分けよ。

飛ぶ 語る 強ふ 撫づ 改む 答ふ 生く
朽つ 集む 聳ゆ

二学期

二、次の文中より動詞をぬき出してその何活用なるかをい

へ。

- (1) 花の吹雪と散り布く中を走り行く。
- (2) 雲行けば舟も、たがひ、舟行けば雲もまた追ふ。
- (3) 國民たる者各々國に盡すべき務あり。
- (4) ほのかに聞ゆる瀧の音をしるべに道もなき山路をたどりぬ。
- (5) 靜に觀ずれば宇宙の富は殆と三坪の庭に溢るゝを覺ゆ。
- (6) 朝は夙に出でゆき、夜は晩く歸り、風をも雨をも厭はず、男子に劣らず働きけり。

(7) 彼は母の寫眞を、死ぬる際まで、肌身離さず持ち居たり。

三、國文讀本中の一章より動詞を抜き出してその活用形を

いへ。

四、次の文語を口語に直せ。

- (1) かの時の恥辱一生忘るゝこと能はず。
- (2) 女は一たび嫁けば夫の家をもつて我が家とす。
- (3) 夫の秘密を告ぐるは妻の道にあらじ。
- (4) 彼は朝早く起くる習慣あり。
- (5) 家の外に干したる布とりいるるも見ゆ。
- (6) 魚跳つてまた水に落つる音石を投ぐるやうなり。

〔四〕動詞の假名遣 動詞の活用には之を書き表はす假名と發音と一致せぬもの有るが故に往々誤を生ずることあり。たとへば

老いたる人はうたひの本をみてゐる。

の「老い」「うたひ」「ある」「い」「ひ」「ゐ」の如し。かくの如く假名を誤らずに書く法を假名遣といふ。今次に假名遣につき二三の事柄を注意せむ。

〔一〕動詞はすべて五十音圖の一行に限りて活用することは前説きたるが如し。さればある動詞の一つの語形を知るときは他の語形の假名遣に誤なきことを得。

例へば「強ひ」が「ハ」行に活用することを知れば「強ゆ」「強ふ」の誤なること明に、「老ゆ」が「ヤ」行に活用することを知れば「老ひて」「は」老いての誤なること明なるが如し。

〔二〕活用に「い」を必ず用ゐるべきは「老い」「悔い」「報い」(上二段)の三語のみなり。これらは「ゆ」「ゆる」と活用するを以て「ヤ」行の音なるを知るべきなり。

〔三〕同じく「ヤ」行の動詞にて活用に「え」とかくべきは「消え」「越え」「榮え」(下二段)などなり。これらも必ず「ゆ」「ゆる」と活用するを以て誤ることなし。

〔四〕この外「え」をかくべきは「得」(下二段)のみなりとす。

〔五〕活用に「わ」をかくべき動詞は決してなし。活用に「ゐ」を

かくべき動詞は「居る」「率ゐる」「用ゐる」(ワ行^{上二段})の三にすぎず。

(六)活用「ゑ」をかくべき動詞は「植ゑ」「飢ゑ」「据ゑ」(ワ行^{下二段})の三のみなり。この三語の終止形「植う」「飢う」「据う」は誤りやすければ注意すべし。

(七)活用に「じ」をかくべき動詞は上二段サ行の「掘じ」とサ行三段活用の「感じ」「論じ」「重んじ」の類のみなり。

(八)活用に「ず」をかくべきはサ行三段活用の「感ず」「論ず」などの外はただ「掘ず」(上二段^{サ行})「混ず」(下二段^{サ行})の二語のみなり。

練習

次の文中の空位にかなを加へ、且誤あらば正せ。

- (1) 過は必悔○改めよ。恩は必報ひよ。
- (2) 友人を誘ゐ、弟共を率いてすゞみに出かけ候。
- (3) 飢ゑる者に食を與○よ。人の命は輕ん○べきものにあらず。
- (4) 彼は人を救ゐたり。その行誠に感ずるに堪えたり。
- (5) 御話の面白いので、思わぬ時間をすごしました。
- (6) よく人を教○しかば就きて學ぶもの常に絶へず。

(四) 動詞の音便 「讀みて」「書きて」の如く動詞の連用形に「て」(口語にては「た」「て」をつゞくる時には發音の便により時とし

て「讀んで」「書いて」の如く他の音に轉ずることあり。之を動詞の音便といふ。音便には普通四種あり。

(一)「S音便。四段活用カ行ガ行の動詞の連用形なる「き」「ぞ」の「S」に轉ずるものをいふ。

書きて… 書いて (文語)

書いて (口語)

漕ぎて… 漕いで (文語)

漕いで (口語)

(二)「ウ音便。四段活用ハ行の動詞の連用形なる「ひ」「う」に轉ずるものをいふ。

問ひて… 問うて (文語)

問うて (口語)

(三)「ん音便。四段活用のバ行マ行及びナ行變格活用の連用形なる「び」「み」に「ん」音に轉ずるものをいふ。

飛びて… 飛んで (文語)

飛んで (口語)

讀みて… 讀んで (文語)

讀んで (口語)

死にて… 死んで (文語)

死んで (口語)

(四)促音便。四段活用のタ行ハ行ラ行及びラ行變格活

用の連用形の「ち」ひ「り」が促音に轉ずるものをいふ。

勝ちて… 勝つて(文語)

勝つて(口語)

従ひて… 従つて(文語)

従つて(口語)

取りて… 取つて(文語)

取つて(口語)

有りて… 有つて(文語)

有つて(口語)

練習

一、次の文中の傍線を施せる語を音便に改めよ。

(1) みづから請ひて看護婦となる。

(2) 勇み立ちたる人々は喜びて出發の準備をしたり。

(3) 都下の人口は年を逐ひて増加す。

(4) 進みては忠をつくさんことを思ひ、退きては君の過を補はんことを思ふ。

二、次の文に於ける音便の誤を正せ。

(1) 溪に沿ふて進む。

(2) 職工皆樂しむではたらく狀感ずるに堪へたり。

(3) 敵は終に國を割ひて和を請ふた。

(4) 學問は重荷を負ふて坂を攀づるが如し。

三、次の文章のうちより動詞を抜き出し、その假名遣の誤れるものは正せ。

- (1) 食ふてその味い^いを知らぬは食はぬに等し。
- (2) 陣形を整ふるに先だちて襲ふて敵を破る。
- (3) 笑ふて答えず。
- (4) 歌いて植へよや門田の早苗。
- (5) 絶へず雨降るは堪えがたし。
- (6) 恩に報ゆることを知らぬものは人非人なり。
- (7) 負ふた子に教えられて浅瀬を渡る。
- (8) 養ふた上に敬うことが大事だ。
- (9) 恥じて能く改め、覺へて忘れず。

養ふ
ふは
ん

- (10) 我が言ふ事を用いずば後に悔ふとも及はじ。
- (11) 飢へ凍へたるものは衣食を擇ぶに違あらず。
- (12) 余は久しく病牀に呻吟せしが母が心をつくしし甲斐ありて、さしも重かりし病氣もやうく癒へて歩行に堪ゆるに至れり。

第四章 形容詞

山高し。

風涼し。

清き水流る。

美しき花咲く。

右の文例において「高し」「涼し」「清き」「美しき」は何れも事物の有様をあらはしたる單語なり。かくの如きものを形容詞といふ。

〔四〕形容詞と動詞とを總稱して用言といふ。

〔五〕山高くば眺望よからむ。

山高く聳ゆ。

〔一〕山高し。

高き山に攀ぢ登る。

山高ければ眺望に富む。

風涼しくば心地よからむ。

高
けきしくく
れ

涼
しししく
けき
れ

風涼しく吹き渡る。

〔二〕風涼し。

涼しき風絶えず吹く。

風涼しければ心地よし。

右の文例より推して形容詞に關し次の事柄を知るべし。

〔一〕形容詞も動詞の如く活用す。

〔二〕動詞は五音圖の一行に限りて活用すれど、形容詞はカ行サ行の二行に亘りて活用す。これ兩者の異なる點なり。

〔三〕形容詞の活用形は〔一〕の如きものと〔二〕の如きものと
の二種あり。

(四)形容詞の活用形は、その用方、動詞に同じく、従つてその語形の名稱も動詞に準ず。但形容詞は命令形を缺く。

(五)形容詞の活用形は未然形と連用形と相同じ。

〔奥〕「高し」「涼し」の形容詞につき口語の活用形を考へみよ。然る時は前者は終止形、連體形が「い」となり、後者は同じく終止形、連體形が「しい」に變ることを知るべし。

〔奥〕「如し」といふ形容詞は特別なるものにして已然形を缺き、なほ、上に名詞、代名詞、又は用言の連體形を受けてはじめて形容詞の用を完くするものなり。

月の光明にして晝の如し。

歲月は流るゝ如し。

漕ぎ行く舟のあとなき如し。

〔奥〕形容詞にも音便あり。例へば「善きかな」とすべきを「い」音便によりて「きをい」に變じ「行正しくして」とすべきを「う」音便によりて「くをう」に變じて

善いかな。 行正しうして、

とするが如し。

〔奥〕用言の活用せざる部分を語幹といひ活用する部分を語尾といふ。例へば「遮る」「高し」の「さへぎ」「たか」は語幹にして「る」「し」は語尾なり。

練習

一、形容詞の活用形を表にて示せ(口語)

二、次の文中より形容詞を抜き出してその活用形をいへ。

丸い月、淡く、東いよく白し。

- (1) 月は益々淡く、東いよく白し。
- (2) 親しき友ほどなつかしきはなし。
- (3) 海邊は空氣が清く、冬も暖い。
- (4) 新しい方は値が高く、物がよろしい。
- (5) 取締を厳しくして、社會の風紀を改めた。
- (6) 死は鴻毛よりも軽く、義は泰山よりも重し。
- (7) よろしき品はおほかた價たかきものなり。
- (8) おもしろき島多し。

第五章 助動詞

- (9) あかるう見ゆるほど氣持よい事はない。
- (10) その色のうるはしう、その香のゆかしい事も一の源因であらう。

〔吾〕 賞を受くれども驕らず。打消

日影はやうやく、わがもとに來りぬ。見了
一見して知るを得べし。推量

右の文例において、ずは上の動詞を助けて打消す意味をあ

らはし、ぬは動作の完了したるをあらはし、べしは推量の意味をあらはすに用ゐらる。かくの如く動詞の下につきて更にその意味を助くるに用ゐるものを助動詞といふ。

〔五〕一つの助動詞を附するのみにて意義不十分なる時はなほ他の助動詞を附することあり。例へば

ただ人口の多きを以て誇るべからず。

丘上の老松は行平の月見の松と名づけられたり。

の如きこれなり。

〔五〕

彼をして平時に出でしめば亦治平の良宰相ならむ。
この言にては未だ首肯せしめ難かるべし。
教師、生徒に本を讀ましむ。

しししし
めむむめめ
れる

ししき
か

(一) 實に外人をして驚かしむるものあり。

大音聲にて下知せしむれどしづまらず。
一切馬を殺さざるやう取計らはしめよ。

彼はかく言ひき。

(二) かく言ひし人は誰か。

かく言ひしかどわれは信ぜず。

右の文例によりて助動詞に關し、次の事柄を知るべし。

(一) 助動詞も動詞、形容詞の如く活用す。

(二) 助動詞が動詞(助動詞)につくにはそれ〴〵一定のきまりあり。

〔五〕 助動詞の活用には、下二段活用、ラ行變格活用、ナ行變格

形動詞の活用

書か = 412712 動詞

書か

書か 助動詞

動詞のトフツト即ける

詞、カカシキ

助動詞の頭

るか中へとる

活用の如きあり、或は全く特殊のものあり。今次に各の助動詞の活用を表にて示さん。用例は各自試みよ。

(一) 下二段活用の如き活用をなすもの「る」「らる」「す」「さ

す」「しむ」「つ」などこれに屬す。

動詞

口語体には「らる」「る」は「る」に属す。

助動詞

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	
言は	れ	れ	ゆる	る	る	れ	四段變格の未然形につく
言は	れ	れ	ゆる	る	る	れ	四段變格の未然形につく
教へ	られ	られ	らる	らる	らる	られ	二段一段三段の未然形につく
言は	せ	せ	す	する	すれ	せ	四段變格の未然形につく
教へ	させ	させ	さす	さする	さすれ	させ	二段一段三段の未然形につく

助動詞

とらるるに合ふ

カ

書か	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ	すべての動詞の未然形につく
書き	て	て	つ	つる	つれ	(て)	すべての動詞の連用形につく

●終止形の語形を以てその助動詞の名稱とす。

●表中括弧内の活用は殆ど現代文に用ゐられず。以下之に準ず。

「る」「らる」「す」「さす」の助動詞は口語にては下一段活用の如き活用をなす。「しむ」は口語には用ゐられず。なほ口語には別に「せられる」「が約りて」「される」といふ形となりて下一段の如く活用す。例へば「許可され」「許可される」「許可されれ」の如し。「つ」は口語にてはただ「て」といふ連用形のみ存す。

右のうち「べし」は口語には用ゐず、「まじ」は口語にては「ま
い」となりてただこの語形のみ存し、「たし」は「たい」となり
て口語の形容詞の如き活用をなす。なほ口語には「な
い」「らしい」といふ助動詞ありて口語の形容詞の如き活
用をなす。

んをりする
つやうに

(五)特殊の活用なるもの 「ず」「む」「き」などこれに屬す

		未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	
書か	〇	ず	ず	ず	ぬ	ね	〇	動詞の未然形に つく
書か	〇	ず	ず	む	む	め	〇	動詞の未然形に つく

書き	〇	〇	き	し	しか	〇	動詞の連用形につ くカ三段サ三段に つくには例外あり
----	---	---	---	---	----	---	----------------------------------

「き」の活用「し」「しか」はカ行三段活用には未然形連用形に
つけど「き」はつかず。又サ行三段活用には「き」は連用形
に「し」「しか」はその未然形につく。而この「き」は口語に用
ゐることなし。又右の「ず」は口語にては「ぬ」となり「む」は
「う」または「よう」となる。

練習

次の文中より助動詞を抜き出してその活用を考へよ。

- (1) 夜の明けぬ中に家を出てむ（付む）
- (2) 日も暮れはてて物のあやめも見えずなりぬ（在甲）

- (3) 柳處々にありて末は霞に包まれたり。
- (4) 家貧しければ高等の教育も授けられず、讀書算術を學ばせたる後はいづれも自活の途につかしめぬ。
- (5) 講じ終りし後ゆるく不審の箇所を問ふべしと諭されぬ。
- (6) 秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬ。
- (7) 御身御大切に御風召したまはぬやう遊ばされたく候ふ。
- (8) 幾多の艱難を経辛苦をこらへて事業を完成した時の心持も大方こんなものであらう。

○
 〔蓋〕 助動詞のあらはす意義は種種あり。今それらの意義を説かむ。

- (一) 「らる」は意義全く一にして、これらは彼が爲に破らる。博覽達識を以て世に稱せらる。の如く動作を他より受くる意味をあらはすに用ゐらる。これを受身といふ。又これらは一時間に一里は走らる。高き峠も下駄にて越えらる。の如く能力をあらはすに用ゐらるることあり。これを可能といふ。又

兄上は親類のうち^に赴かる。

主人は今朝旅行先より歸宅せらる。

の如く崇敬の意をあらはすに用ゐらる。

(二)「す」「さす」「しむ」は意義一にして、これらは

騎兵馬を走らす。

栗を籠に入れさす。

弟をして犬を打たしむ。

右の文例に見る如く、他をして動作をなさしむる意味をあらはすあり。これを使役といふ。又

琵琶をよくひかせ給へり。

皇太子殿下には北海道に行啓せさせ給ふ。

天皇陛下には大觀兵式に臨ましめ給へり。

右の文例において見る如く敬意をあらはすに用ゐることあり。

崇敬の意の「す」「さす」「しむ」は單獨に用ゐることなく

「らる」又は「給ふ」と結合して用ゐるを常とす。

(三)「ず」は打消す意味をあらはすものなり。

人は單獨に孤立して生活し得るものにあらず。

又「ざり」といふ語ありてこれも打消す意をあらはせり。

人物の出でざる蓋し怪むに足らず。

容易くいふべきにあらざれどもかくさず申さむ。

右の「ざり」は打消の「ず」とラ行變格の「あり」と連結したる

ものにして、その活用もラ行變格活用に同じ。但し終止形を有せず。

(四)むは將來の事を豫ねていふ意味をあらはすものなり。勉めてやまずば何事も成就せむ。

(五)つ「ぬ」たりはその事の完了せる意味をあらはすものなり。

ふと樵夫の唄聞えつ。

日は暮れぬ。

月は出でたり。

(六)き「けり」は過去にありし事を思ひめぐらしていふ意味をあらはすものなり。

かかる例も數々ありき。

昔支那に孔子といふ人ありけり。

(七)たしは希望の意味をあらはす。

されど故郷には歸りたし。

(八)べしは種々の意味をあらはす。

一見して知るを得べし。

右の文例においては推し量る意味をあらはすに用ゐたり。又

以てその注意深きを見るべきにあらずや。

三尺の秋水鐵をもたつべし。

の如く可能の意をあらはすものと、

事務を取るには瑣事たりとも仔細に吟味すべし。
 の如く指圖することを示すものあり。又
 人は必道德を守るべきものなり。
 の如く義務の存するをいへるものなり。
 又「べかり」といふ語ありて「べし」と略同じ意をあらは
 せり。
 酒を飲むべからず。
 本を讀むべかりき。
 右の文例にある「べから」「べかり」「は」「べし」とラ行變格活用
 の「あり」と連結したるものにて、その活用もラ行變格活
 用の如し。但し普通文に用ゐるは上例の如く未然形

連用形のみなり。

(九)「まし」は打消す意の推量をいふに用ゐらる。
 よも忘れはすまじ。 覺悟せよ。

練習

次の文章中より助動詞を抜き出して、その活用及び上
 の語との連結、並に意義を吟味せよ。

- (1) いと華美に装ひたる武士をその側に侍らしめき。
- (2) 十五夜に影を見せざりし月は今宵照りいでぬ。
- (3) 知らぬ事は知らずと答ふべし。
- (4) 毎日千字づつ書出すべしと命ぜられたり。

いりり
まらり
まらり

夏休みの中
みふま
するや
より過き

未然形 又 得 来る
 現在動詞
 未然形 又 得 来る
 現在動詞
 未然形 又 得 来る
 現在動詞

- (5) 眠らむとすれば、た易く眠らる。
打音の推定
- (6) 悪事をなして誰も知らじと思ふは愚の甚だしきものといふべし。
打音
- (7) 書籍室は船の前方にあり、凡そ二十疊を敷くべし。
打音の推定
- (8) 物羨みはすまじきものよと諭されたり。
打音の推定
- (9) この雪が何時消えるとも思はれない。
打音の推定
- (10) 行方も知れず失せにけり。
打音の推定
- (11) 雨がやんだら散歩に出かけようと思つてゐた。
打音の推定
- (12) 他人のつくりたるものによりて利益を占めむと思ふが如き考にては到底望なし。
打音の推定
- (13) 砂漠の中に出でければその困苦いふべくもあらず。
打音の推定

〔五〕 助動詞の用方につき特に注意すべき事柄を次に列舉せむ。

- (一)「らる」がサ行三段活用につくには、その未然形をうけて許可せらるなどすべきを、口語にてはこれを約めて許可されると用ゐることあり。
- (二)「さす」がサ行三段活用の動詞につくにはその未然形をうけて「修繕せさす」「案内せさす」といふべきを口語

にては「修繕させる」「案内させる」と用ゐることあり。

(三)現代の普通文には用ゐられざれど、古風の文章などに散見する助動詞二三をあぐれば「まし」「じ」「けむ」「らむ」「らし」「めり」などなり。これらは何れも推量の意味を有するものなり。

世に故郷ほどこひしきはあらじ。

春の心は長閑からまし。

あはれこの槍もていかに戦場に馳驅し給ひけむ。

秋はつる色のかぎりを見するなるらむ。

山の紅葉も今は散るらし。

じ

ませ、まし、
ましか。

けむ、けめ、

らむ、らめ、

らし。

めり、める、
めれ。

立田川紅葉亂れて流るめり。

(四)助動詞がいくつも相連結したる時はその助動詞の各の意義より推してその意義を知るべし。

讀みたりけむ。 咲きぬらむ。

散りてき。 咲きたるらむ。

優りたりけり。 優りてけり。

知りてむ。 滅びてけむ。

知りなむ。

練習

一、次の文中にある助動詞の意味を吟味せよ。

(1) たつた川紅葉亂れて流るめり、渡らば錦中やたえなむ。
たつた 紅葉 亂れて 流るめり 渡らば 錦中やたえなむ

(2) 御覽じ忘れさせ給ふにつけても身の衰へぬる程思ひ知られ候。
御覽じ 忘れさせ 給ふにつけても 身の衰へぬる程 思ひ知られ候

(3) 吉野山やがて出でてじと思ふ身を花ちりなばやと人やまつらむ。
吉野山やがて 出でてじと思ふ身を 花ちりなばやと人 やまつらむ

(4) 吉野山みねの櫻やさきぬらむ。
吉野山みねの 櫻やさきぬらむ

(5) 參議百川謀をめぐらして定め申してき。
參議 百川謀を めぐらして 定め申してき

(6) いづれもく年の暮れなむとするを語る。
いづれもく 年の暮れなむとするを 語る

二次の文章に誤あらば正せ。

(1) 義經與市をして扇眼を射せしむ。
義經 與市をして 扇眼を 射せしむ

標 正せ

よるつくる

(2) 此品に手を觸るべからず。
此品に 手を觸るべからず

(3) 此處に塵芥を捨つるべからず。
此處に 塵芥を 捨つるべからず

(4) 彼は毎夜深更まで勉強するらし。
彼は 毎夜深更まで 勉強するらし

(5) 無用の事には關係せまじきものなり。
無用の事には 關係せまじきものなり

(6) 不都合の事なきやうこゝろふべし。
不都合の事なきやうこゝろ ふべし

(7) 目的をとげやうと誓う。
目的をとげやうと 誓う

(8) そうゆうわけはなかるふとおもひ。
そうゆうわけは なかるふとおもひ

(9) 富士山嶺の雪は夏も絶えまじ。
富士山嶺の 雪は 夏も 絶えまじ

(10) 事こゝに及びては斃る處まで行くよりほかなし。
事こゝに 及びては 斃る處まで 行くよりほかなし

(11) 萬里の波濤も越えれば越ゆるべし。
萬里の 波濤も 越えれば 越ゆるべし

(12) 習うよりは馴れる。
習うよりは 馴れる

- (13) 腐敗ししものを食はば必ず胃を害するべし。
(Handwritten: 胃を害する)
- (14) 夕陽山の端に殘影をとどむ頃顧みがちに別れ行く。
(Handwritten: 顧みがち)
- (15) 彼かくいひ出^ルし時衆皆驚きぬ。
(Handwritten: 然形トつからず)

第六章 副詞

副詞
動詞、形詞、形容詞
限定する他
他の副詞の意を味ち
限定す

〔冥〕 空にはかに曇る。
學未だ成らず。
山はいよ／＼高く、路はます／＼險し。
右の文例において「にはかに」「未だ」「いよ／＼」「ます／＼」は何れも曇る「成らず」「高く」「險し」等のそれぞれの動詞、形容詞に

副詞
ま ず
た だ
い よ
ま す
あ づ
か へ
い ち
い ち
い ち
い ち
い ち

副ひてその意義を限定せり。すべてかくの如く用言の意義を限定するために副へて用ある單語を副詞といふ。
〔毛〕 副詞は、往々他の語を隔て、下の用言の意義を限定することあり。
あ、諸子は既にこの意を悟りたらむ。

幸にして虎口を脱せり。

〔天〕 副詞には他の副詞の上に直接に副ひてその意義を限定するものあり。
や、暫く考ふ。
最も早く来る。

練習

一、次の文中より副詞を抜き出せ。

(1) やがて日は紅の球を揺して山に落ちぬ。

(2) 新月の影まさに海角をはなれたり。

(3) しばしば友人に訪はれたれど我は未だ一回もその

友人の家を訪ひたる事なし。

(4) 辯士は悠然と演壇に登りて徐に説き出せり。

(5) これらの動物は唯子を生んで養ふばかりでなく、尙

これを教へ導いてから、初めてこれを手放すのであ

る。

(6) 夕景始めて傘さして頼家卿の墓を拜しぬ。

(7) 王何ぞ必ずしも利をいはん、唯仁義あるのみ。

(8) 志を立て、只管勉強せば、終には業成る日あるべし。

二、國文讀本中の一課より副詞を集めよ。

三、次の副詞を用ゐて短き文をつくれ。

最早 曾て 豈に

蓋し 敢へて 況んや

只管 忽ち 専ら

1 最早や日は暮サシ
2 曾て人下は口管ア
3 豈に又もアヤ
4 蓋し又もアヤ
5 敢へて又もアヤ
6 況んや又もアヤ
7 只管又もアヤ
8 忽ち又もアヤ
9 専ら又もアヤ

女子教育 日本文法書 上卷終

大正十四年十月廿九日訂正三版發行	大正十四年十月廿五日訂正三版發行	大正十二年二月十三日訂正再版發行	大正十一年十二月十八日發行
------------------	------------------	------------------	---------------

上卷・下卷	各金貳拾貳錢
價定	昭和三年變臨時
各金參拾七錢	

不詳	女子教育	複製
日本文法書		
大正十四年四月版		

著作者 山田孝雄

發行者 大葉久吉

印刷者 吉田松次

東京市日本橋區本銀町三丁目拾四番地

東京市牛込區市谷加賀町一丁目拾貳番地

場工一第舍英秀京東所刷印

發行所 關西專賣

東京市日本橋區本銀町三丁目
振替口座東京二八〇番

大阪市西區阿波堀通四丁目
振替口座大阪四三番

株式會社 寶文館

株式會社 大阪寶文館



文庫

5

926

8975

広島大学図書

2000068975

